■書評

石川巧・大原祐治編『占領期の地方総合文芸雑誌事典』

森　祐香里

本事典はそのタイトルが示すとおり、GHQ占領下に各都道府県において発行された総合文芸雑誌を対象とするものである。占領期の雑誌研究をめぐっては既に多くの蓄積があり、とりわけ、占領下における検閲の産物であるプランゲ文庫、そして20世紀メディア研究所による同文庫のデータベースの存在は大きく、本事典はその補完的役割を担うものとして、序論において示されている。むろん、本事典はプランゲ文庫の補完のみに終始していない。そもそも、プランゲ文庫自体が占領下の日本において刊行された出版物を網羅的に収集したものであり、その収集数は膨大なものである。この膨大な資料群をどのように活用するのか、研究者はその視点を問われるべきであり、本事典はプランゲ文庫、ひいては占領期日本とどのように向き合うのか、その視座を〈地方総合文芸雑誌〉という枠組みから供してくれる。

ここで本事典の構成に触れておきたい。本事典は、上巻・下巻・別冊の構成をとっており、上巻が東日本編、下巻が西日本編、そして別冊では雑誌タイトル索引や人名索引、資料保存機関一覧等を収録している。なお、各雑誌はAランクあるいはBランクにランク分けされており、ランクによって文量が異なっている。基本項目としては、書誌事項や「創刊の経緯」、「主な執筆者」、「特徴ある誌面」、「GHQによる検閲」が設けられており、とりわけ、「創刊の経緯」ならびに「特徴ある誌面」の項目からは、雑誌の雰囲気を掴むことができる。

掲載されている雑誌群については都道府県によって差があり、福岡県の一七冊が最も多く、対して県の雑誌出版状況の概括にとどまり雑誌の立項数が0冊となった県（滋賀県と島根県）も存在する。しかしながら、このことは本事典の瑕疵を示すものではない。本事典では、個々の雑誌についてだけでなく、各都道府県の出版状況についても「扉」として概説が付されており、ここから滋賀県と島根県において総合文芸雑誌を立項することの困難さを垣間見ることができる。〈地方〉という語では包括できない、都道府県毎の出版状況を本事典によって解することができるのだ。

*

さて、本事典のタイトルである〈地方〉という語をめぐっては、本事典のあとがきで大原祐治氏が既に指摘を受けたと言及するように限界や問題を内包してはいる。しかしながら、一方において、〈地方〉という言葉を抜きにして占領期の雑

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

誌群を理解することもまた困難である。その要因として、第一に日本の同時代的な出版状況が挙げられる。戦火によって出版の中心地であった東京がその機能を低下させ、その結果、地方での出版が目立つようになったという時代的状況を看過することはできない。第二に、当時の各地における文化運動の盛り上がりもまた軽視できない。北河賢三『戦後の出発　文化運動・青年団・戦争未亡人』（青木書店、二〇〇〇年一一月）は、戦後の文化運動の担い手となった文化運動団体が当時「全国津々浦々にまで」「結成されたのは未曽有のこと」であったとしており、占領期の雑誌群における〈地方〉の役割は他の時期と比して大きい。そしてなにより、この文化運動の結果刊行された雑誌には、〈地方〉という言葉が多く掲げられていた点を見過ごすことはできない。一例として、青森県で発行された『月刊民報』に雑誌の「構想」として掲げられた「地方文化の復興」（「編集後記」創刊号、一九四六年七月）という文言からも看取できるように、各地で雑誌が創刊される出発点に〈地方〉があったことは、本事典によっても確認できることである。占領期において各地で沸き起こった文化運動、その功罪を見据えるためにも、〈地方〉という視座は必要であろう。

とはいえ、各雑誌を〈地方〉という言葉のもと、ある特定の地域のみに限定して把握しようとするのもまた早計であろう。雑誌間でどのようなネットワークを形成していたのか、そして〈中央〉ないし全国へと何を、どのように、発信しようとしていたのか、視座は多くある。

今回、本事典を通読して評者がキーワードとして取り上げたいのは〈世界〉である。本事典に散見された、〈世界〉を見据え刊行された雑誌について、試みとして宮城県で発行された『東北文学』を参照してみたい。『東北文学』は河北新報社から発行された雑誌であり、高橋新太郎「東北文学」（『国文学　解釈と鑑賞』一九六五年一〇月）は「地方文化運動の推進に貴重な役割を果し、地方文学界に刺激を与えた」雑誌として高く評価している。本事典では高橋秀太郎氏が「総じて、中央文壇、あるいは世界文学を見据えながら、東北の文化的程度を高めることが狙いの文芸雑誌であったといえる」と雑誌の特色について総括しているが、ここで「世界文学を見据え」るということの内実について、同氏「『東北文学』解説」（『東北文学』解説・総目次・索引』不二出版、二〇一六年九月）からその詳細を確認してみたい。ここでは、石川湧による連載「世界文学手帖」（連載開始時の第一巻第九号（一九四六年九月）のみ「世界文学」）や、特集「一九三〇年代の世界文学の動向を探る」（第四巻第九号、一九四九年九月）を例に、「文学とは何かを考える基準を日本のみならず海外にも求める姿勢を示し続けること」によって、雑誌創刊時の目的の一つである「一流」雑誌としての質を維持しようとする意図を見出すと同時に、さらに「世界の一流文学を紹介すること」によって、「東北をそれが東北であるという理由だけで賞賛するという意味での

「郷土主義」になることを避けつつ、「東北の文化的程度を引き上げることにつながる」るものとしている。

しかしながら、『東北文学』における世界文学の関心のあり方は、単に他国の文学への目配せや、世界文学の受容といった態度に留まらない。岡崎義惠「近代日本文芸の世界性」（第五巻第一号、一九五〇年一月）は既存の「日本文芸」が「世界の文芸としてどのやうな意義を持つか」、換言すれば「日本文芸」の「世界文芸としての性格」について論じ、その流れで「日本文芸」の「自国の文芸を外国に与へて他に感化力を及ぼし、自己を世界的な位置にまで拡大してゆくといふ方向」の「乏し」さを指摘した文章であり、「日本文芸」を「世界文芸」たらしめようとする問題意識を確認することができる。また、第四巻第一〇号（一九四九年一〇月）から計五回掲載された松本宏一による創作月評も特徴的である。この創作月評の特徴は、「採点表」を付し各雑誌に掲載された小説群を点数化して評価している点である。この「採点表」の採点者が松本と匿名の人物二名、計三名で構成されている点にも特色が見られるが、注目すべきは点数による評価基準である。「四〇点　凡作。」から始まり、八〇点以上を「世界的水準」、（第四巻第一〇号、一九四九年一〇月）あるいは「世界的文学」（第五巻第一号、一九五〇年一月）として「問題にするに足る」ものと定めている。事実、第四巻第一〇号に掲載されている「採点例」には、九十一点以上の作品としてトルストイ『戦争と平和』やゲーテ『ファウスト』といった、まさしく世界文学の典型的な作品群が列挙されている。これら「採点表」や「採点例」等について、松本は「日本文学を世界文学の水準で評点」することによって、「いいかげんな作家のいいかげんな気持でやるやつつけ仕事」を「止めさせる」、あるいは「われわれ人類が手にとることのできる世界で最も秀れた作品を土台にして、ものを見」（第四巻第一〇号）る視点の獲得を挙げている。こうした誌面からは、世界文学を受容するという受動的な姿勢のみではなく、自分たちが作品を評価し、自分たちで〈世界文学〉を冠するに相応しい文学を見出そうとする能動的な姿勢を読み取ることができるのだ。

ここまで、『東北文学』に見られる日本から〈世界〉へという方向を参照してきたが、本事典によれば〈世界〉を視野に入れた雑誌は『東北文学』に限定されるものではない。世界文学の紹介も含め、〈世界〉を特色に指摘がなされている雑誌として青森県の『月刊民報』や東京都の『雄鶏通信』、京都府の『新文学』等が言及されている。なお、京阪地区に関しては、既に和田崇「終戦直後の関西雑誌メディア」（『立命館言語文化研究』二〇一二年二月）が関西の雑誌の特色を指摘するなかで雑誌『世界文学』（京都府）について言及しているが、本事典を通読することによって、特定の地域・雑誌に限定されることのない、各所における〈地方〉から〈世界〉へという姿勢を、確かに感じることができる。

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

占領期における〈世界〉を志向する姿勢は、戦時中の翼賛文化運動から続く戦後地方文化運動のナショナリズムを考えるうえでも、検討する必要があるように思われる。かつて、世界文学を提唱したゲーテが国民文学を超えるものとして想定したように、占領期地方総合文芸雑誌における〈世界〉へのまなざしがナショナリズムを克服する手段として機能していたのか、あるいは、寧ろナショナリズムを強固にするものとしてあったのか、それは各雑誌を詳細に検討したうえでしか結論付けられない。

ところで、占領期における世界文学との関連については、私見によるが研究が少ないように思われる。一例として、秋草俊一郎『「世界文学」はつくられる 1827-2020』（東京大学出版会、二〇二〇年六月）には、占領期の記載は少ない。世界文学全集を対象とするという方針に拠るところが大きいのであろうが、他方、占領期においては地方文化運動がそれまでにないほどの盛り上がりを見せていたこと、そして地方雑誌の収集の困難さもまた研究の難度を上げているのではないか。こうした観点に立てば、占領期とは固有の専門性が問われる領域であり、日本近現代文学研究者の側からアプローチしていく必要性があるように感じられる。

＊

ここまで、長々と地方雑誌における〈世界〉性に対する私見を述べてしまったが、これは評者が本事典を通読して触発された結果でもある。本事典の序論において、石川巧氏は「本事典の必要性」や「本事典の活用方法」を挙げており、その一つに研究の促進を掲げている。「戦後から1950年代にかけて地方で出版された雑誌に関する総攬的な視点での研究を促進させるという点で画期的な意義を有している」と氏自身によって本事典の意義が説明されており、この点に関して、一読者として評者もまた強く同意するところである。先の評者の私見は、本事典によって生まれ得る新たな研究展望の一つであり、本事典の必要性を示す証左の一つとして示しておきたい。

最後に、編者によって言及されている占領期の雑誌の散逸をめぐっては、評者も日々危機感を募らせているところである。それは占領期の出版物に見られる仙花紙をはじめとした粗悪紙による資料保存の問題であると同時に、雑誌を所蔵する大学や図書館をはじめとした各種機関を巡る社会問題も大きく関係している。公共図書館や大学を取り巻く環境は日々厳しくなっていく一方であり、こうした状況にあって、各大学や図書館がどこまで自らの蔵書を維持できるのか、不安が尽きない。こうした時勢にあって、本事典は現存する占領期地方総合文芸雑誌をとりまとめた一つの成果であり、同時に今後の研究の起爆剤となるものとして、必読の書であろう。

（金沢文圃閣、二〇二二年七月発行、上巻（二二〇頁）・下巻（二三八頁）・別冊（一〇四頁）、二八〇〇〇円＋税）